芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 68　61・3

もくじ

奈良の古刹に詣でて　宮崎　豊……1

―― 特集・芸振加盟団体の活動 ――

大分県俳画同好会……2

県吹奏楽連盟・県文化団体連絡協議会……3

県民演劇制作協議会・県日本舞踊連盟……3

さざ波・宮瀬香多士　・　大分の文化財……5

第1回海外研修に参加して・文化短信……7

スバルと人(その9)菅　久・文化ニュース……8

発行人・挟間正年　編集人・高塩　至

奈良の古刹に詣でて

大分県芸術文化振興会議副会長
大分県美術協会名誉会員
宮崎　豊

奈良の諸寺は年頭松のうちは、開帳していて本尊、秘仏まで拝観させてくれる。

年頭に際してこれら仏教美術の文化財にじかに接することは、自ずから心の洗われる思いがして自分の芸術心をかき立てられる喜びがあるものだ。

今年は奈良にある、東大寺、興福寺、薬師寺とお参りしたが、そのうちで西の京の唐招提寺にお参りした感銘を書いてみよう。

唐招提寺は人も知る唐の高僧鑑真和上によって天平の昔この地に開山されたのである。

聖武天皇の御代、奈良は天平仏教が咲く花の匂うが如く栄えていた。この時にあたり天皇は唐の国からこの鑑真和上を仏教界の受戒の師として招聘した。和上はそれに答えてわが国に向った。しかし到着するまでに12年を費やし、其間5回まで渡航に失敗するなどあらゆる苦難の末、奈良の都に着いた時は両眼を失明していた程であった。かくして東大寺大仏殿の前に戒壇をもうけ聖武天皇を初め高僧達に授戒を与えた。すでに仏教国家であったわが国が、画竜点睛をなしとげたと云う訳だが、これもひとえに和上の命がけの情熱による功績と云わなければならない。

南大門をはいると、正面に、わが国、現存の最大の天平建築である金堂が落着きを見せて鎮座しており、大屋根に鴟尾が千二百年の歴史を見せて目にしみ入る。外廊にギリシャ神殿を思わせるエンタシスの大円柱が並んでいるのも見落してはならない。開扉された金堂内にはいる。

本尊乾漆盧舎那仏、薬師如来、千手観音、四天王など他の天平仏とは一種違った大陸的な大きさと厳粛さに圧倒され、その技術、芸術性の高さに魅了されるばかりだ。

金堂、講堂、礼堂の立並ぶ中を北に通りぬけると東山魁夷の障壁画のある御影堂がある。年間6月に3日しか開扉されない。残念だが外観だけを見て東に通り過ぎた林の中に鑑真和上の御廟がある。どうかすると一般には忘れられがちなところだ。和上は東大寺戒壇院を引退されて当寺をここに創建して在わすこと4年、76歳にして示寂した。廻りの堀の中に一段高く後廟は永遠に輝きを見せて大和上を偲ぶに十分である。

この外奈良の諸寺院にはこうした仏教美術遺産が世界の奇跡と云はれる程残されている。現代に生きる芸術にたずさわる者、このことに深く感謝し自分の芸術の進展への尊い糧としなくてはならないと思うばかりである。

飯尾寿夫(二紀会)

特集　芸振加盟団体の活動

文化団体待望の芸術文化基金も６年の年月をかけ、61年より完全実施されることになった。基金事業計画にもとづき幅広い活動が期待されるわけである。ではその構成団体の活動の現状はどうなっているのか――どのような組織で、どのような活動をしているのか、それぞれの団体に次のような項目で現状を書いていただいた。(1)会の目的　(2)活動の概略　(3)現状と展望　(4)会員数……など（掲載順は、一応県単位の団体、大きい団体からとし、各号で数ジャンルを載せていく予定である。）

大分県俳画同好会〈美術〉

10周年を前に

会員は年々増加の一途

中津市民芸術文化祭俳画展

事務局長　足　立　佐代子

(1)　会の目的

大分県下の俳画愛好家の親睦と研鑽をはかり、加えてより多くの人々に絵を描く喜びを味わって頂くため発足しました。

(2)　組織の概略

昭和53年、大分を中心とする臼杵、津久見、別府、中津に散在する俳画愛好家の方達により役員を選抜して発足しました。絵の上手、下手にかかわりなく、誰でも自由に入会できます。

(3)　会 員 数　250名

(4)　活動の現状と問題点

年一回レクリェーション（親睦をかねてのスケッチ旅行）と県芸術祭参加行事の一端として展覧会を実施しています。展覧会は、最初はトキハ七階で、最近はレインボービルにて行なっています。初めはとに角、何でもよいから出品する事に意義があるという気持ちでしたが、段々と俳画の味が分かるにつれ徐々にですが俳画展らしきものとなって来ました。これからはお手本に頼らず、各自自分の絵が描ける様にと願っています。

(5)　今後の展望

入会はしないでも愛好家達は年々増加の一途を辿っている事は喜びです。来年は10周年を記念して特別な企画が加わる予定です。

特集　芸振加盟団体の活動

大分県吹奏楽連盟〈音楽〉

会員数 2,800名
マーチングフェスティバル
など県民に親しまれる
演奏活動に……

大分県吹奏楽連盟事務局長
工　藤　紘　喜

3年後に大分国体を控えた昭和38年5月8日に「国体の式典演奏を我々の手で成功させよう」の合言葉で大分県吹奏楽連盟が誕生した。

それまで県下には5、6団体しか数えることの出来なった吹奏楽団も、連盟結成と共に一挙30団体をこえる数となった。国体の開閉会式では 800人編成により無事大任を果すことができたが、国体終了と同時に吹奏楽活動は急速におとろえを見せ出した。その原因は、大目的を達成した安堵感と目的を失った事、スポーツ音楽への急速な対応であった。連盟にとっては冬の時代を経験した。その打開策は、昭和48年県芸術祭開幕行事「県民吹奏楽」であった。吹奏楽の持つ多面的な演奏活動を積極的に推進し、より多くの市民に「親しまれる演奏」を柱に各団体の指導者育成と技術の向上を図ってきた。

現在では毎年開催される連盟行事として「アンサンブルコンテスト（1月）」「コンクール（7月）」「マーチングフェスティバル（8月）」「吹奏楽祭（11月）」を開催している。現在、当連盟の加盟数は56団体（小3、中23、高20、大3、職3、一般4団体）会員数約800名と連盟発足以来最大規模に成長した。今後は一層発展させるため、県下の地域的格差の均衡と少編成による未加盟団体の加入促進活動、指導者の育成、市民的行事への参加を重要課題として取り組んでいる。

大分県文化団体連絡協議会〈総合〉

平和美術展・勤労者美術展
などへの協賛

文団連代表幹事代行
木　村　成　敏

戦後の民主的な文化運動の胎動の中から「働く県民の新しい形の文化創造と普及」を目標に全国的にわきおこった文化運動の先進的な運動として、国民文化会議との連帯のもとに昭和32年5月大分県民文化会議が生まれました。この県民文化会議が県下のいろいろのジャンルの文化創造と普及に大きく寄与したことは「文芸大分」の発行や文化学校の開設「大分のうたごえ」や「総合文化祭」や「県民文化音楽」や「平和作品展」の開催などであきらかです。しかし時代の推移と共に個人中心の組織ではこれに対応しきれず、県下に続々と生まれた芸術団体の「民主的な発展」と連絡協力のためにはそれぞれの組織の自主的な参加と行動が必要であるということが痛感され県民文化会議の発展的解消と同時に大分県文化団体連絡協議会が昭和45年6月に発足しました。

当時の参加団体は県民文化会議の個人会員をひきつぎながら大分労演、大分労音、民主文学同盟大分、大分文化財を守る会、新世紀群、大分平和展世話人会、リアリズム写真集団、大分支部などの文化団体を中心に組織され、代表幹事に中沢とおる氏、事務局長に原田辰好氏が選ばれ各団体、個人から若干名の幹事が選ばれました。

しかし「働く県民文化運動」の性格やそのめざすもの他団体との連帯や共同行動などについての見解の相違やそれぞれの団体のアンバランスや会の消長などもあって組織は正直云って開店休業の状況です。しかしはなやかな県民文化の開花の中で、平和と民主主義をめざす文化の創造と発展を深く探究することが一層必要になってきているときだと考えています。現在は平和美術展の開催と、勤労者美術展への協賛に一定の役割を果しているのみです。

特集　芸振加盟団体の活動

カーテンコールの幕がおりた瞬間劇団員の満足な顔・顔

大分県民演劇制作協議会〈演劇〉

ふるさとに根ざしたオリジナル作品
全国の演劇仲間との交流も具体化

制作委員長　**中　沢　とおる**

(1)　会の目的

平和と自由と民主主義を愛する健全な演劇創造活動にとりくみ、ふるさとの文化の発展に力をつくす。

(2)　組織の概略

名誉会長１　会長１　事務局（制作委員長１　事務局長１　次長３　局長５）文芸部・演出部・舞台美術部・演技部　顧問19　制作協力（ＮＨＫ大分放送局・ＯＢＳ大分放送・ＴＯＳテレビ大分・大分合同新聞社・県立芸術会館）県民演劇友の会発足。

(3)　会　員　数

46人　休団２　留学１

(4)　活動の現状と問題点

ふるさとに根ざした（歴史・事件・人物）オリジナル作品を、今年上演予定の２作品を含めて14年間で19。演劇教室（１年単位、劇団員外の希望者中心）卒業公演４、観客延人数51,600人。他ジャンル援助作品多数。映画・テレビ・ラジオドラマ出演。秋は県芸術祭、初夏に自主公演が演劇教室、年間２本を制作。直接的問題点は男性が入ってこない（プロを含めた全国的状況）こと、戯曲の新しい書き手が育たないこと。全劇団員の継続討論実施中、成果あり。

(5)　今後の展望

いままでの路線に自信、この道を歩む。九州、西日本全国の演劇仲間との交流に具体的に入る。

大分県日本舞踊連盟〈舞踊〉

国外友好諸国との文化交流も
日舞による
国際親善――――――

代表者　**花　柳　笹之丞**

(1)　会の目的

会員相互の親睦を図り乍ら、技能教養の向上に努め、もって、斯道の昂揚と県文化の発展に寄与しようとするものである。この目的達成のために、毎月25日を例会日として、会員の親睦と研修を行い、また、舞踊に関する研究及び各会員の発表会等の事業その他必要と認める事業を行う。

(2)　組織の概要

大分県内に住居または教授所を有する各流派の専門師範であって本連盟に入会した会員により組織され、この連盟の運営に必要な役員は次のとおりである。代表者１名　同副１名　理事８名　書記２名　会計２名その他顧問若干名、役員は毎年度末に開催される総会において会員の中から選出され、代表者は理事の選出によって決められ会務を総理し連盟を代表する。

(3)　会　員　数　30余名

(4)　活動の現状と問題点

毎年開催される大分合同名流会の参加出演を初めとして、例年秋季に実施される大分県芸術祭にも参画し、開幕行事或は閉幕行事を担当するなど県下の文化活動の一端を荷い、また会員の自主的活動として各個に発表会を催し更らに各地域において企画される芸能文化祭に積極的に参加し間断なく日舞の研究と普及活動が行われその成果も顕著なものがあると見受けられる。ただ遺憾に思われる点として文化活動の主要地である別府地区において、従来の文化施設が除去され各種芸能文化団等の活動の場が失われることとなり今後の文化の発展向上に与える影響も大きいため早急に対策を考慮する必要を痛感するものである。

(5)　今後の展望

本連盟は今日まで、ひたすら日本の代表的な伝統芸術である日舞の研鑽及び普及活動に専念し国内的には地方文化の発展向上に努めて来たが、今後は出来ることなら国外友好諸国との文化交流を行い、日舞を通じて友好の輪を拡げ国際親善の一助ともなる機会に恵ぐまれるよう配意していきたいと思う。

さざ波

芸振発足20年

ぜひ実現してほしい県立の博物館

県芸振会議理事

宮　瀬　香多士

芸振会議が発足して20年が過ぎた。早いものだ。私はたまたま準備段階から関係していたので、よけいにその感が深いのかもしれない。だが30代後半だった私が、もう50代半ばに達している。そんなことを思えば、やはり20年の歳月は長いものだと思う。

この20年、私にとって一番印象に残っているのは、やはり美術博物館建設運動だ。上田保氏を促進期成会の会長に街頭募金やオークションなどもした。これは一応、県立芸術会館として実を結んだが、まだ博物館建設計画は実現していない。いまとしては博物館プラス文書資料館として、ぜひ実現してもらいたいものだ。

これからの時代、科学文明が進めば進むほど、心の豊かさが求められてくる。美しいものを美しいと感じ得る心、他を尊重する心…そういう心は、長い人類の文化遺産に接し、その素晴らしさ、厚みを肌で感じることによって培われるところが大きいと思う。

いま多くの県に博物館が出来ている。私は他県を訪れた際、必ず博物館に行くことにしているが、いつも感じるのは〝実物〟にふれる素晴らしさだ。京都でだったか、銅鐸を初めて見たとき、いままで写真や図版などで見ていて、いま一つ実感を伴わなかった〝銅鐸〟というものが、ストレートにつかめたような感じがした。大きさや形、文様もそうだ。たとえば〝流水文〟といわれても理解しにくかったが「ああ、これが流水文か」と、理くつなしに伝わってくる。また目の前の銅鐸を通して、その中に秘められた千数百年前へのいろいろな想いが私の脳裏をよぎり、興味はつきなかった。

また鳥取の博物館には鳥取県の生物や植物などのコーナーがあったが、これなどは学校教育にも随分役立つのではないかと思った。

美術館や博物館などというものは、人間形成の面で即効性はないかもしれない。しかし長い目で見た場合、軽んずることの出来ないものだと思う。芸術を愛し、歴史的遺産を大切にする、そんな環境から人が得るものは決して少くないものと思う。地方財政の厳しい時代であるかもしれないが、大分県にも早く博物館などの施設がほしいものだ。

大分の文化財（7）

田能村竹田「暗香疎影図」

紙本墨画　淡彩一三三・五×五六・五

（国指定重要文化財）

天保二年、別府に遊んだ竹田が、荒金呉石に描き贈った図。宋代の詩人の生活を素材としたもので、運筆、用墨、色彩配置、画面構成など、竹田芸術のすべてが統合されている。緊張感とリズム感に富んだ高雅な画世界が生み出され、文人の理想的境涯をほうふつとさせるものがある。竹田の代表作の一つであると同時に、わが国南画史上に光彩を放つ名作である。

市町村文化活動の現状

山香町文化連盟

――17部門21団体
ふるさと祭りと共催
盛大な文化祭に――

山香町文化連盟が発足して、今年は23年目を迎えました。

山香町は古い時代から貴重な文化遺産が多くのこされています。戦後社会情勢の変貌と共に日常の生活様相、惑いは人間関係も大きく変ってきました。こうした中でふるさとに住む人々の心に明るさと豊かな生活を、そしてゆとりのある人生を開くためにと、芸術、文化、芸能部門の指導者や同好者等、当時文化活動に貢献されていた方々の総意で昭和39年10月、文化団体として山香町文化連盟が発足しました。当初は、絵画、書道、短歌、俳句、音楽の５部門でしたが、その後今日まで会員の努力と諸先生方のよりよき指導を得て、内容も充実し併せて町民総参加を呼びかけて来ました。現在では文化芸能部門のあらゆる分野が連盟に加入し、その数は17部門21団体に達し大きく成長しています。尚発足の基となった総合文化祭（展示会発表会）は今日まで盛大に継続され22回を迎えています。

昭和56年からは山香町ふるさと祭りが催されており、文化連盟もこれに共催し一層の盛りあがりをみせています。この外に各部門毎時季に併せて発表会、展示会を開催しています。現在連盟に加入している団体は次の通りです。

絵画(39)、書道(39)、俳句(39)、短歌(39)、音楽(39)生花３(41)、詩吟２(47)、日舞(45)、盆栽(47)、謡曲(47)、民謡(52)、箏曲(53)、大正琴(57)、茶道(56)、三味線(57)、菊友会(57) 21団体　　（　）の数字は加入年次

この文化連盟の運営は、総会及び理事会並びに役員会（三役と事務局）の決定事項にしたがって会費（１団体年間 5,000円）と町からの補助金 220,000円の外事業収益及び寄付金等で運営しています。事業運営は主に理事が当たり総会は年１回、町外研修旅行と併せて行って居り楽しみの一つです。

山香町文化連盟事務局長
山香町中央公民館長　河野　茂通

学校巡回
特別公演好評

基金事業の一つである学校巡回公演は、好評のうちに昨年七月に終了したが、それ以後特に要望のあった山国町と耶馬渓町各教育委員会の管内で、十二月二十二日に県洋舞踊協会によるバレエ公演が開催された。ここでも大変好評で、生の舞台に感激した生徒の感想文を紹介する。

槻木中三年　三好克己

今年のフィナーレを飾るすばらしいバレエを見せてもらい感動でいっぱいでした。音楽をからだで表現した時の美しさというものが理解できたような気がします。

初めての経験でした。本物を見るということは、自分にとってもすばらしい経験の一つです。この経験でまた自分がすこし変ったような気がします。

クラシックバレエとモダンバレエがあるようですが僕はやはりクラシックの方に引かれました。それからモダンバレエもすばらしいと思いました。これからもすばらしいバレエを多くの人達にみせて、感動をあたえてほしいと思いました。

芸振主催事業

第1回 海外研修に参加して

〝書は人なり〟の原点を再認識

県美協書道部常任委員
県習字編集委員
河村又一郎

県芸術文化基金海外研修生第１号の栄光に浴し、漢字のふるさと中国の主要都市を20数日間かけめぐった。書道を勉強するものにとって、すばらしい書芸の旅を満喫できたよろこびにひたっている。何といっても、４千年の歴史を持ち人口10億、面積 960万平方キロという、途方もない大国の中国である。わずかな期間で、何れの領域にせよその真奥をきわめることは、到底不可能である。しかしこの脚で歩き、この眼でたしかめた20数日間で中国大陸に大きな親しみをおぼえた。書に対する研究もさることながら、平均月収６、７千円という貧乏な生活だが、解放と４つの近代化をめざす中国人民の眼はかがやいている。物余って心おごる日本とは全く対照的である。学校に於ても、いじめ、暴力どころか、子どもたちは学習意欲にもえている。うらやましい限りであった。書に関しては上海で明清の大家の真筆、西安碑林や龍門20品のすばらしさに圧倒された。単に書の技がすぐれているだけではない、これを書きあげた人格の偉大さがしのばれて、品格の高い書風に魅せられた。〝書は人なり〟という原点にかえり、今後の学習を進めなければならないことを強く再認識させられた。文化基金海外研修生第１号という重責のある訪中であったが、要は今後の私の書に対する情熱と真摯な態度が、これに答える唯一のものであると自覚している。残り少ない人生かもしれないが、全身全霊命の限り書に打ちこみたいと思っている。

私の訪中にあたり、平松県知事を始め、文化課の方々県美協書道部の幹部の方々の心温まる御指導御鞭撻を心から感謝して報告にかえたいと思う。

天安門広場にて

文化短信

挾間会長、浜田副会長の受賞をお祝いする会

県民文化功労者として県知事表彰を受けた挾間芸振会長、地域文化功労者として文部大臣表彰を受けた浜田芸振副会長の受賞をお祝いする会が、多数の参加者を得て盛会裡に終わった。

昨年十二月二十日、大分市商工会館にて、県美協、俳画同好会、音楽協会、吟詩会、万謡会、洋舞協会、県民オペラ、県民演劇、合同新聞社など、芸振加盟団体や、個人など、約一三〇人が会場にあふれ、二人の受賞をお祝いした。

れんさい

スバルと人（その9）

菅　久

第十一回スバル展（三十三年）は前回とほぼ同じメンバーで開かれた。その中で東京から送られてきた矢岡勲氏の百号二点「車と手」「群像」の特異な立体派的作品が印象に残っている。翌年十二回展には新同人児玉成弘・毛井正臣両氏を迎えて新味を出し、盛会裡に会は終了した。しかし十一回展後最後まで残っていた創立同人油野誠一氏（横浜在住）が退会したその頃からスバルもマンネリ化してきたのではないか？という噂が一方にはあった。

こうした中で三十五年に第十三回展を開くための同人会議が開かれた。そこには新人として安藤真・十時良両氏も顔を見せ、熱心な論議がかわされたが、論点の中心はスバル存続か否か？にいつしか移行してしまった。神田千里氏を中心とする急進勢力はすでに新グループ結成の腹が決まっていた。話は一挙にスバル解散、グループ「前衛」誕生となって幕をとじたのである。

十三年十二回展を開いてきた美術研究団体スバル会は、時代の波によってつぎつぎとメンバーを変え、延べ四十人が制作と美術論議に情熱を傾けて実験作品を発表しつづけた。十三年の寿命は短かったけれど燃焼の炎は非常に大きかったといえる。

いまスバルの火が消えて四分の一世紀。五十九年八月に創立同人であった広瀬通秀氏が県立芸短大教授を退官した機会に、回想記〝自由と夢〟出版記念も兼ねて「スバルを語る会」を開いた。参集した者、広瀬通秀、早川和（正氏子息）、岩男順、江藤明、古川栄、松岡定、中条正一、幸米二、木村昌斗志、内田弘、松原朝丸、松野良治、十時良の各氏に菅久、菅玲子、合同新聞社から宮崎寛一郎、狭間久、帆足靖一、首藤三郎各氏が顔を見せて楽しかったスバル時代を語りふりかえった。

この時もいろいろな思い出、メンバーの懐しい人間像について花が咲いたが、いまここでもう一度当時の一部同人像にふれてみたい。四十人は互いに他人からはあらゆるものを吸収した。しかし中でも蜜の多かったのは油野誠一、広瀬通秀、荒木剛、岩尾秀樹各氏であったと思う。岩男順氏からは彫刻、小野一郎氏からは日本画、木村昌斗志氏をはじめ写真のメンバーからは写真の常識を学んだ。ボナールに傾倒しそして離れた三重野一郎氏、猪熊師を慕う早川正氏の一途な気持ち。ダンディーで清潔な田中昇氏。年齢を感じさせない風貌と作品の中条正一氏、松岡定氏、末光拾一氏。

よく飲んで人生論や芸術論をたたかわせた神田千里、古川栄、児玉成弘各氏はいまもつづいている。静かに飲むのは荒金透氏、几帳面な文学青年といった感じは江藤明氏、土の香りの都会派矢岡勲氏、デザイン出身個性派の地味な市原康孝氏、庶民的まなざしの小野百合子さんと鋭い目をした薬師寺ハマさん。病魔と闘った徳田宗忠氏、若くして昇天の嶋川隆介氏、全身これ若さといった発言は松野良治氏だった。

その他堅実な画風に現代を求めようとし一回でやめた渡辺賢二氏やバー青騎士の毛井正臣氏。写真では幸米二氏や木村昌斗志氏など画面づくりのうまさに感心したものである。また最後まで会に残った内田弘氏の友情など。

こうしたスバルの歩みと姿は、最終参加のため入口まできて「前衛」に横すべりした安藤真、十時良両氏も含めて、いつの日か回顧展が開かれる時をひそかに夢みるものである。（完）

（芸振常任理事）

文化ニュース

□ ウィーン少年合唱団大分公演　**4月7日（月）**
18：30～大分文化会館
S席 3,500　A席 3,000

□ ザ、グレンミラーオーケストラ楽団結成50周年記念公演　**4月9日（水）18：30**～大分文化会館
S席 4,500　A席 4,000　B席 3,500

□ 新制作座演劇フェスティバル　**4月9日（水）**
10日（木）17：45～県立芸術会館
S席 7,000　A席 6,000　B席 3,500

□ ヴィクトリア・デ・ロス・アンヘレス、チャリティリサイタル大分公演　**4月22日（火）**
18：30　県立芸術会館

□ 浦川宣也　ヴァイオリン、リサイタル
3月31日（月）　18：30　別府市民会館

□ 浜田九一郎展　**4月15日（火）～4月20日（日）**
県立芸術会館

□ **大分大学教育学部美術科同窓会展**
4月15日（火）～4月20日（日）
県立芸術会館

□ **5周年記念大分国画写真展**
4月15日（火）～4月20日（日）

□ **アジア現代美術展**
4月22日（火）～5月5日（月）　県立芸術会館
観覧料　一般 400円（当日）
300円（前売）
学生 200円（当日）
100円（前売）

発行所・大分市府内町県教育庁文化振興会議事務局＊印刷・㈱双林社＊題字・野田南圃